

平成21年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

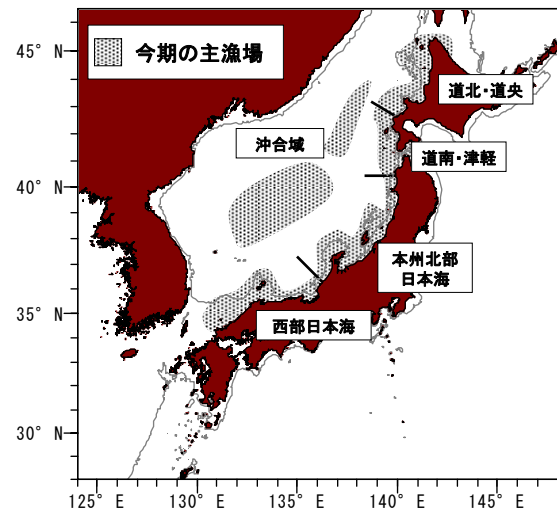
－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2009年8月～12月)のポイント

対象魚種：スルメイカ
対象海域：日本海
対象漁業：主にいか釣り漁業
対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

- (1) 来遊量：ほぼ近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：9月以降に沖合域で好漁場が形成
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

* 近年は最近5年間(2004年～2008年)



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：今井、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

平成 21 年度第 2 回日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2009 年 8 月～12 月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業（中型いか釣り、小型いか釣り）

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：概ね対象期間を通じて形成。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年並み。近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：10 月以降にも漁期のピークがある。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年並み。近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：活発な漁場形成はない。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均より小さい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年並み。近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：主に 11 月以降。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

5. 沖合域（中型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：昨年および近年平均並み。
- (2) 漁期・漁場：主に大和堆周辺海域、8 月下旬～9 月には武蔵堆周辺にも形成。
- (3) 魚体の大きさ：前半は近年平均より小さい。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

** 近年平均は最近5年間（2004年～2008年）の平均を示す。



I 予報の説明

2009年の6月までの漁況の経過、6月下旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成21年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

【1. 道北・道央（小型いか釣り）】

道北・道央海域では通常、7～8月と10～11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は小型個体を中心であるものの、昨年および近年平均を上回った。しかし、今年6月の漁獲量は昨年並みで、近年平均を下回った。

今期の漁況は、昨年および近年平均並みと予想される。魚体の大きさは、前半は昨年並みで近年平均より小さい見込み。

【2. 道南・津軽（小型いか釣り）】

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークで、年によっては10～11月にもう一つの小さなピークが出来る場合がある。近年、6月～8月の漁獲量は減少傾向にある。漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊量は昨年を下回り、今年6月の漁獲量も昨年並みで近年平均を下回った。

今期の漁況は、漁場一斉調査結果や6月の漁況から、昨年並みで近年平均を下回ると予想される。ただし、漁期後半にも漁獲のピークがあり、10月以降は昨年および近年平均並みと予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

【3. 本州北部日本海（小型いか釣り）】

本州北部日本海域では漁期の中心は5～7月であり、近年は8月以降にこの海域での活発な漁場形成は見られていない。今年5月～6月の漁獲量は、昨年の値を上回ったものの、近年平均を下回った。今年の漁場一斉調査結果では、当海域では小型個体が多かった。

今期も活発な漁場形成はなく、魚体の大きさは近年平均より小さい見込み。

【4. 西部日本海（小型いか釣り）】

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に主に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。今年5月～6月の漁獲量は昨年および近年平均並みであった。今年の漁場一斉調査結果では、大和堆付近での来遊量は昨年を下回ったが、道北では小型個体を中心に昨年以上を上回った。

今期の漁況は、近年平均を下回り、昨年並みと予想される。漁期は、道北および太平洋側から魚群が南下する11月以降が中心と予想される。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

【5. 沖合域（中型いか釣り）】

沖合域では主に大和堆付近が漁場となり、8月下旬～9月には武蔵堆付近も漁場となる。今年の漁場一斉調査結果では、大和堆付近での来遊量は昨年を下回ったが、道北では小型個体を中心に昨年以上を上回った。

今期の漁況は、昨年および近年平均並みと予想される。前半は大和堆付近が漁場であるが、8月下旬から9月には武蔵堆付近で好漁場が形成される見込み。魚体の大きさは、前半は近年平均より小さい見込み。

II 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 漁場一斉調査結果

1) 分布状況

2009年の日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の分布状況を日本海漁場一斉調査（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。調査結果の概要は下記の通りであった（図1）。

- (1) 道北～道央海域では、CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）が40尾以上の分布密度が高い調査点があり、武蔵堆付近では非常に分布密度が高い調査点（180尾）もあった。しかし、この海域では小型個体が多く、外套背長17cm～18cm台が中心であった。
- (2) 道南・津軽海域では、分布密度が低い調査点が多く、魚体も外套背長17cm～18cm台が多かった。
- (4) 本州北部日本海では、能登半島から佐渡周辺海域を中心に比較的分布密度が高い調査点があったが、外套背長17cm～18cm台の小型個体が多かった。
- (5) 西部日本海では隠岐諸島付近で分布密度が比較的高い調査点もあったが、外套背長16cm台以下の小型個体が中心であった。
- (6) 沖合域では、大和堆を中心にCPUEが30前後の分布密度が比較的高い調査点が多かった。沖合域では、沿岸域に比べて外套背長21cm以上の個体の比率が高かった。しかし、外套背長23cm以上の個体は近年平均よりも分布密度が低く、沿岸域と同様に小型である傾向がみられた。

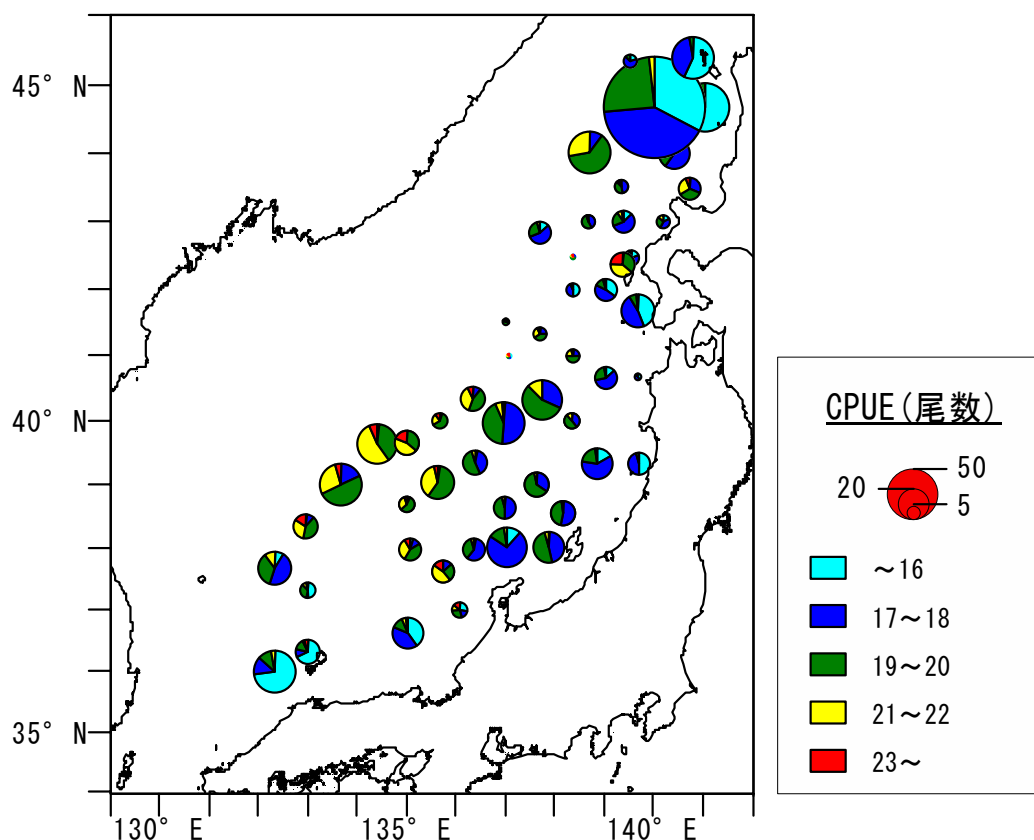


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況 図中、●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示す。

2) 資源水準

釣獲試験を行った全調査点の平均 CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集尾数）を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数の過去 30 年間の変化傾向として、1970 年台と 1980 年代は減少傾向・中～低水準であったが、1990 年代は増加傾向となり、中～高水準になった（図 2）。2002 年に資源量指数は最も高くなったが、2003 年～2007 年にはやや低下した。

2009 年の資源量指数は 18.24 尾であり、昨年（21.06 尾）の 87%、近年平均（15.27 尾）の 119%であった。

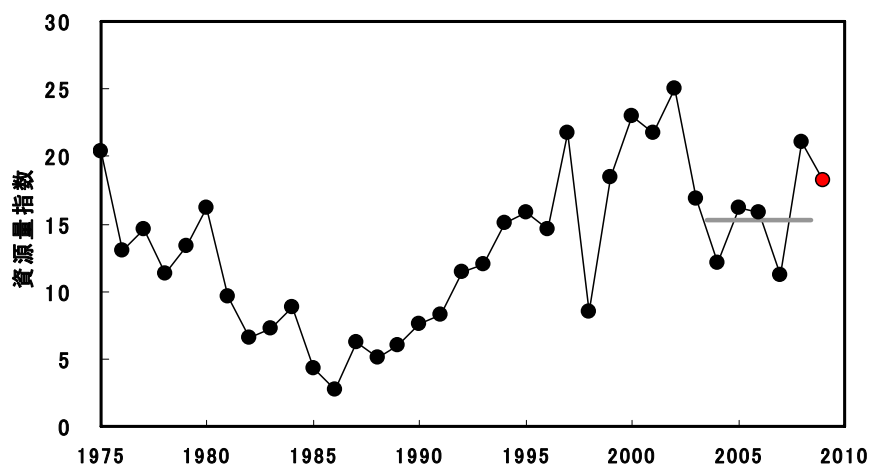


図 2 スルメイカの資源量の指数の変化 太線は近年平均（15.27 尾）を示す。

3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図 3 に示す。2009 年は外套背長 18cm 台以下の小型個体の資源量指数は、近年平均を上回り、昨年並みであった。しかし、外套背長 21cm 以上の個体の資源量指数は昨年および近年平均を下回り、外套背長 23cm 以上では近年平均を大きく下回った。

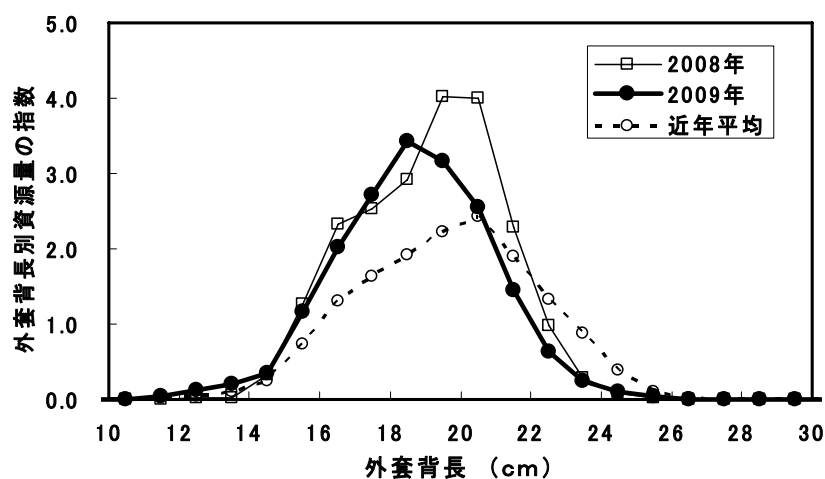


図 3 日本海漁場一斉調査結果による CPUE 重み付け平均体長組成 各外套背長階級の値は釣機 1 台 1 時間あたりの平均採集尾数を示す。

2. 2009年6月までの漁況の経過

2009年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。昨年は、魚体が小型であったことによる魚価安と燃油高騰によって5月～6月の漁獲量は低調であった。今年6月の本州北部（石川県～秋田県）の漁獲量は昨年を上回り、ほぼ近年平均並みであった。一方、今年6月の道北・道央および道南・津軽の漁獲量は昨年並みで、近年平均を下回っており、来遊が遅れた状況となっている。

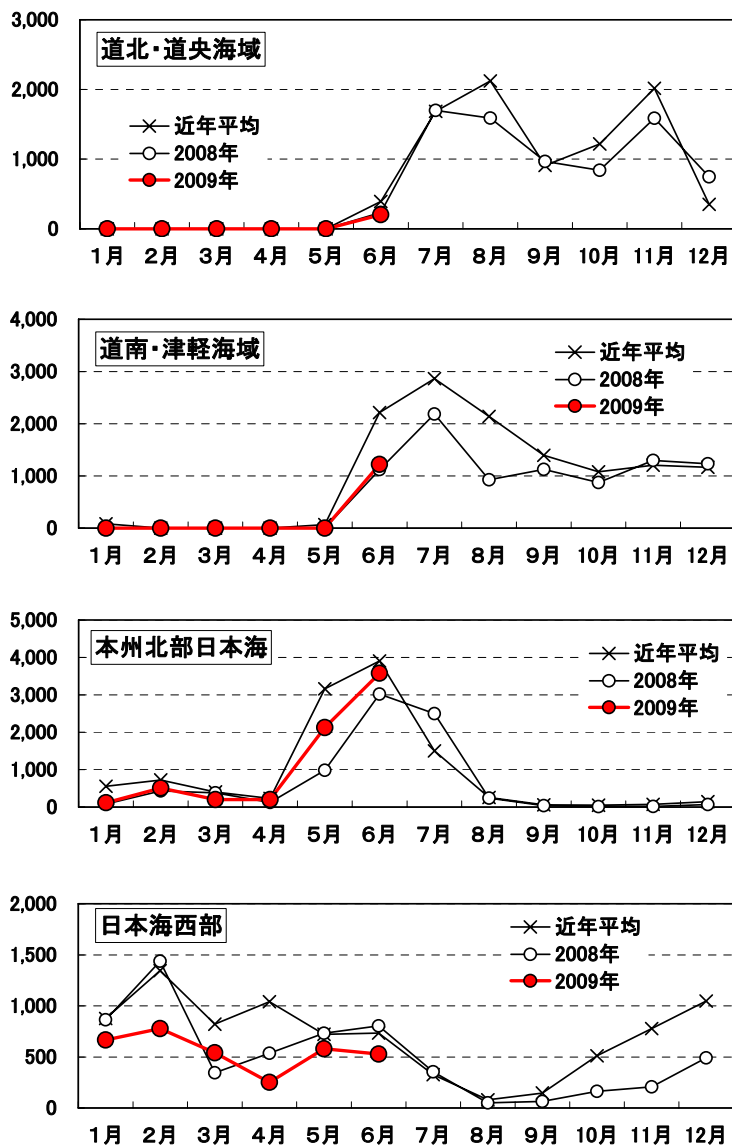


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関資料より作成（一部未集計）。

3. 太平洋側（冬季発生系群）の分布状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を経由して日本海に來遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成21年度第1回太平洋スルメイカ長期漁況予報 (<http://abchan.job.affrc.go.jp/index.html>) によると、太平洋側では、來遊量が昨年を上回ると予想されている海域が多い。

参 画 機 関

北海道立中央水産試験場	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県農林水産技術センター 水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産試験場	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	長崎県総合水産試験場
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
福井県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所
京都府農林水産技術センター 海洋センター	東北区水産研究所 日本海区水産研究所